

教育実習指導について I

～教職経験とふり返り～

大西 勝也

はじめに

教育実習は、教員になる前の教職経験の機会である。それはまた、「教えることと学ぶこと」の関係性を、身をもって把握できる機会、「教育者としての使命や必要とされる資質を肌で感じとる機会」、「教育技術を体験的に学ぶ機会」、「教職への決意を確かめる機会」ということができる。⁽¹⁾そこで、教職の基本を勉強してきた学生は、教職の基本を教職の現場で実際に経験する。教職の基本というとき、その内実は教職に必要とされる教養、⁽²⁾すなわち、教職教養、専門教養、一般教養から成る。(学ぶべき教養は無限であるが、一応、大学の個々の授業がある程度該当する)。教育実習に行く条件として単位修得、基礎学力試験や資格試験への合格が設定されるのも、教壇に立つために必要な最低限な教養を身につけるべきという考えに基づくからである。

教育実習指導は、実習前、実習中、実習後の指導を指しているが、そこでは、前述の教養を身につけつつある学生が、教職とは何か、教員とは何か、教員に求められるものは何か、そして、自分にとってのこれからの課題は何か、といったことを改めて実際に学ぶのである。実習前、実習中、実習後を一貫してみるならば、それまで学んだ教養を思い起こしつつ、学び続ける、もしくは、学び続けることを学ぶことができる。では、教育実習の事前、最中、事後の指導において一貫して大切なことは何で

あろうか。ここでは、教職経験とそのふり返りについて少し考えてみたい。

1. 教育実習前と教育実習中・教育実習後の教職経験

先ほど、教職の基本、教職に必要とされる教養(教職教養、専門教養、一般教養)を最低限、身につけておくことが教育実習の前提になると述べたが、教育実習の本質が教職経験にあるとするならば、教育実習指導でとりわけ核になる教養は、「教職とは何か」についての教養であるかと思う。

さて、教育実習中・教育実習後においては、学生には教職の経験があるので、それをふり返りの教材として、教職とは何か、自分にはこれから何が必要となるのかを実際・現実的に考えていくことができるし、それを支援する指導が教育実習指導の要となる。それに対して、教育実習前においては、教職経験があるとすれば、学校ボランティアや学校インターンシップがそれに該当するが、その経験は、教育実習中・教育実習後のそれとはいささかなりとも質的に違うものがある。というのも、学生本人が正規の教員に代わって、校務のすべてではなくとも、教科指導をはじめとする教員の仕事を主体的に行う立場で経験することと、正規の教員の補佐として学校現場で経験することの間には少なからず質的差があるからである。

しかし、実習前であっても、補佐としての教

職経験をふり返り、学ぶことに意義があることは間違いない。

それでは、教育実習前・教育実習中・教育実習後において教職経験をふり返るとはどういうことであろうか。

2. 教職経験のふり返り

思うに、経験とは、思考(反省)により客観的に体験を意味づけたものである。体験は「感情を主体としている」ものであり、「自分とまさしく一体化した」⁽³⁾主観性の強いものであるが、その体験をふり返り、それが反省により客観的に意味づけられたものが経験となる。真摯に教職体験をしていく学生ならば自らその体験をふり返り、体験の意味を考え、体験を経験へと昇華していく。その意味づけが進行していく中で、知識・情報・技能の習得、疑問・課題の発見と解決、知恵の獲得も起こる。もちろん、経験のもととなる体験は楽しいばかりではない。受苦的体験も多々起こる。人間の成長発達に関わる学習の進化はこの受苦的体験をきっかけに生じてくることはソクラテスの産婆術を持ち出すまでもなく、多くの人が経験的に知っているところである。

しかし、教育実習指導で大切にしたいのは、個人の中で自分の体験が反省により客観的に意味づけられる、つまり、体験がふり返りにより経験になるということに留まらない。個人の経験が他者の経験とともに反省され(ふり返られ)、多様な視点や考えを知ることで、また、ふり返りを聴き合い助言し合うことで、換言すれば、対話的な経験のふり返りを通して、個人の経験の意味が増すことをさらに大切にしたいからである。J. デューイによれば、「教育とは、経験の意味を増加させ、…経験を改造ないし再組織することである」⁽⁴⁾が、意味づけられた体験としての経験が再組織され続けることが不断の自己更新、成長、発達となる。それは、個人の内自己完結的に起こるわけではなく、環境

との相互作用の中で起こる。とりわけ、他者との相互作用(関わり)の中で、多くの人が時間(空間化された時間)を共有し、そこで多様な視点や考え、知恵や情報を交換することにより、各人の経験が再組織され、経験の意味が増していく。教職経験の再組織は、同じく、教職経験を有する他者(学生だけではなく、正規の教員ももちろん含まれる)との相互作用、つまり、対話というコミュニケーションによってこそ、生起する。O. F. ボルノー(1903-1992)がいう「覚醒」や「出会い」⁽⁵⁾は、教職経験の中で起こりうるし、教職経験のふり返りを他者とともに行う中でも起こりうる。

まとめ

平成27年12月21日に中央教育審議会から出された「これから学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」(答申)⁽⁶⁾では、教職課程の学生が学校インターンシップや学校ボランティアに参加することの意義に言及し、「教職課程で教育実習の一部に学校インターンシップを充ててもよい」という文言もみられ、教育実習以外の学校現場での体験も広義での教育実習に位置付けられている。そうした広義での教育実習の指導において共通するのが学校現場での体験であり、換言すれば、教職体験である。しかし、教職体験では、それが主観的なものとして単なる思い出に終わることはまずなく、真摯なふり返り(反省)により客観的に自らの体験が意味づけられ経験に昇華される。この経験を、同じ志を有した他者と分かち合い、ふり返り合い、対話することで経験の意味が増すのである。

それでは、教職経験の対話的ふり返りをどのようにセットし、指導したらよいのだろうか。次の課題としたい。(続く)

【注】

- (1) 神奈川大学教職課程委員会「教職ハンドブック」, P.6, 2015年 神奈川大学教職課程委員会
- (2) 「教養」とは何かについての考察が必要である。今後の課題とする。
- (3) O. F. ボルノー (浜田正秀 訳)「人間学的に見た教育学」, P.178, 2001年 玉川大学出版部
- (4) J. デューイ (松野安男 訳)「民主主義と教育」上, P.127, 2015年 岩波書店
- (5) O. F. ボルノー (峰島旭雄 訳)「実存哲学と教育学」, P.64～94, P.139～215, 1976年 理想社
- (6) 中央教育審議会「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」(答申), P.33, 2015年12月21日

以上